

## 4-2 材料色々！戦前のコイン

九州歴史資料館 飛び出すむかしの宝物 解説シート

# 戦前のコイン

深刻化する金属不足



せいどう  
青銅製1銭硬貨



おうどう  
黄銅製1銭硬貨



アルミニウム製五銭硬貨



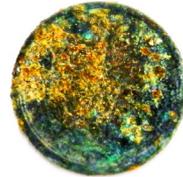
すず  
錫製五銭硬貨



アルミニウム製十銭硬貨



おうどう  
黄銅製50銭硬貨



おうどう  
黄銅製1円硬貨

出土遺跡 ただくま 飯塚市 忠限 宮坂遺跡

忠限宮坂遺跡から発見された炭坑社宅跡から出土した戦前・終戦直後の硬貨です。

近代に入ると政府がその額面で発行したということが、価値の保証となっていきました。紙幣が流通するとともにさまざまな材質の金属が硬貨の材料とされました。日中戦争が始まると対外決済に必要な銀や、軍需資材を確保するために、材質はより悪く、戦時色の濃いデザインか簡単な文様となり、みすぼらしい貨幣となっていくます。

戦時下をくぐり抜けた硬貨は、戦争の激化による国内の金属不足を物語っています。現在でも家庭に残されているかもしれない少額のありふれた貨幣ですが、小さなコイン1枚にも当時の世相を伺うことができます。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



## 4-2 材料色々！戦前のコイン

### 青銅製1銭硬貨から黄銅製1銭硬貨へ

「青銅製1銭硬貨」は、大正5（1916）年に第1次世界大戦に伴う好景気により、国内で貨幣が大量に必要なため発行された硬貨です。表面の菊花文と裏面の桐文に昔ながらの紋章を用いていないのは、大正デモクラシーの時代の自由主義的な風潮が背景にあったといわれています。

「青銅製1銭硬貨」は4%の錫すずを含んでおり、錫すずは日本で算出しない軍事上重要な金属であり、昭和12（1937）年に日中戦争が勃発してさらに需要が高まったことから起こって、硬貨から錫すずを回収するために、昭和13（1938）年に1銭硬貨の材質は青銅（錫と銅の合金）から黄銅おうどう（亜鉛と銅の合金）へと変更されました

### アルミニウム製5銭硬貨から錫製5銭硬貨へ

戦争に備えて貴重な金属であったニッケルを国内に備蓄する目的で、昭和8（1933）年に5銭硬貨は白銅製からニッケル製に替わりましたが、このニッケルを硬貨から取り出すため、昭和13（1938）年に国内でまとまって産出するアルミニウムと銅を材料と「5銭アルミニウム青銅貨」に交替しました。昭和16（1941）年には太平洋戦争が勃発すると、今度は銅を確保するために、アルミ100%の「5アルミニウム貨」に交替しました。

昭和19（1944）年、敗色が濃くなり飛行機材料であるアルミニウムが必要になったことから、5銭硬貨はアルミニウム製から錫すず製に替わりました。これが「5銭錫すず貨」です。太平洋戦争初期に錫すずの大産地である東南アジアを占領していたため、昭和18年段階では比較的国内に豊富にあった金属でした。しかし、制海権を失い輸送路が絶たれ、錫すずの確保が難しくなったため、すぐに製造中止となりました。その後、金属で硬貨を作ることができなくなったため、陶製の硬貨の発行が製作されていましたが、発行前に終戦を迎えました。

5銭硬貨の材質の変化は太平洋戦争の動向をよく表しています。

### アルミニウム製10銭硬貨・黄銅製50銭硬貨・黄銅製1円硬貨

終戦直後に、軍用機用や造幣局用に残っていた金属を使って発行されました。終戦後の激しいインフレで、お金の価値が下がり、「銭」の単位が使われなくなったことから、10銭・50銭硬貨はこれが最後の発行となって、昭和28（1953）年に「銭」が廃止され、額面より材料費が高くなってしまったため黄銅おうどう製1円硬貨も同時に、現在のアルミニウム製1円硬貨に替わりました。

出典 福岡県教育委員会 2003『忠隈宮坂遺跡・鶴三緒七浦遺跡』一般国道201号飯塚庄内田川バイ

## 4-2 材料色々！戦前のコイン

パス関係埋蔵文化財調査報告第2集